校長室だより

松江東高等学校

第49号

令和6年12月23日

○2学期終業式講話 「矜持（きょうじ）」

2学期が終わりました。東雲祭や各部活動での躍動・活躍は、多くの人に感動を与え、それぞれの励みや自信にもつながったと思います。悔しい思いをした人もいると思います。それもこれも全力で取り組むとともに、みんながみんなで協力し合って取り組んだからこそ味わえたものです。そうやって人は成長し、絆を深めていくものだと思っています。

さて、大学受験に失敗して浪人をしていた時覚えた英語に「pedantic」という英単語があります。英和辞典で調べると「学者ぶる」と出てきますが、知識をひけらかすというような意味だと理解しています。大学浪人となり自己肯定感が低くなっていたこともあってか、知ったかぶり、できるふりをする自分に嫌悪感を覚える日々の中、英単語を調べている時に見つけた言葉です。もしかしたら人は、自己肯定感が低い時に「自慢」めいた言動をするのかもしれません。最近は「マウントをとる」という表現もあります。

大学浪人でなく、近世における侍の浪人は、英語でも「ronin」と表記されます。あえて英訳すると「masterless samurai」、仕える主君のいない侍となるようです。そういう意味では、大学浪人も所属する（履歴書に記載できる）学校がない状態なので同じなのかもしれません。大学浪人時は、そのことが余計に自己肯定感を下げ、不安感を助長させていたのだと思います。

1年間必死に努力して大学に入ってからは、歌う機会のない大学の校歌になぜか誇らしさを感じていました。大学の校歌を今でも覚えているのはその証かもしれません。また、大学では、今はソフトテニスと呼ばれている軟式庭球部に入りましたが、大学の名前を背負って出場する団体戦には、先輩が築いてきた栄光へのプレッシャーを感じつつも、言いようのない誇らしさがありました。ここで感じる誇らしさを英語で表現するなら「pride」かもしれません。日本語で言うなら、「矜持」が一番当てはまるかと思います。

「矜持」とは、自分の能力を信じることから抱く誇り、というような意味です。成功から抱く誇りではなく、努力の過程から得た自信とも言えます。決してひけらかすものでなく、自身の内面に持つものです。秋田県のある中学校に訪問した際、「矜持俯瞰（ふかん）」というスローガンが目にしました。「矜持」は、自己肯定感を上げ、自分の言動に信念を持たせるものであり、決してひけらかしたりするのものではない。だからこそ矜持を、つまり自身を俯瞰して見て修正できるようでないといけないという意味かと思っています。

この矜持は、組織や学校に努力して所属できたことで抱くことがあります。松江東高校生であることに誇りを持つ、それは「東高生としての矜持」を抱くことでもあります。英語なら「EAST PRIDE」でしょうか。ここで抱く矜持の土台は、創立以来培ってきた伝統、そして先輩諸氏や現役世代が努力で積み上げてきた栄光や実績、応援する保護者や卒業生、地域の方々など様々な人たちの思いが積み重なってできたものです。その土台があることで、高校生活がより有意義なものになっているはずです・・・ （ 中略 ）

それでは、明日から健康に留意し、なによりも「命」を大切に、家族はもちろん、年末年始で出会う親戚や友人をはじめ、支えてくれている人たちへの感謝の思いを胸に新年を迎えてください。この15日間は、3年生にとっては胸突き八丁、一番苦しいところです。がんばって越えれば何かが見えてきます。1，2年生は主体的学習者になる大きなチャンスです。元気に成長した姿が見られることを楽しみにしています。